
らき すた もう1人の中心人物

冬雪穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた もう1人の中心人物

【Zコード】

Z2907F

【作者名】

冬雪穂

【あらすじ】

山村白緑・・・陵桜学園に通う1年生。現在、泉家に居候中。そこで新たな友達や、2年前にすれ違った少女と再会、そこから繰り広げられる学園ストーリー。 8月3日に改名しました。申し訳ございません。

プロローグ&登場人物（前書き）

始めましてHOWAITOです。
この作品が初書きなので、うまく表現できていないところがあります。
ですが、よろしくお願いします。

プロローグ&登場人物

私は校舎の教室から桜の木を見ていた。桜の木にはツボミが咲き始め春が近いことを告げる。

私は中学3年生で後2週間で中学を卒業する。

「この学校も、もう少しで卒業か。」

私は県内の高等学校に入学が決まつていて、後は卒業を待つだけとなつたが、その前に大きな問題がある。それを越えなければ、高校に入学ができない事になつてしまふからだ、

登場人物

泉 こなた

(いづみ こなた)

年齢：15歳

身長：143cm

出身地：埼玉県

誕生日：5月28日

血液型：A型

利き手：両手利き

家族構成：父、長女

胸ランク：極小

好きなもの：チョココルネ、鶏肉、萌え

嫌いなもの：スポーツ中継の延長、選挙速報などアニメに影響がでる番組、もづく

得意科目：体育

苦手科目：理系

好きな色：赤、黒

漫画やアニメ、ゲームが大好きな女の子。

その為、思考パターンが好きな作品に影響される・・・。高い運動能力を持つが、その能力をいかす事のないインドア系。

柊 つかさ

(ひいらぎ つかさ)

年齢：15歳

身長：155cm

出身地：埼玉県

誕生日：7月7日

血液型：B型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長女、次女、三女、四女

胸ランク：中

好きなもの：甘いもの、目新しいもの。
嫌いなもの：ピーマン、オカルト、ホラー

得意科目：家庭科

苦手科目：体育

好きな色：白

かがみの双子の妹。雰囲気に流れやすい。典型的なお人よしな癒し系。実はマヨラー？

柊 かがみ

(ひいらぎ かがみ)

年齢：15歳

身長：156cm

誕生日：7月7日

血液型：B型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長女、次女、三女、四女

胸ランク：中

好きなもの：お菓子

嫌いなもの：貝類、体重計

得意科目：英語

苦手科目：家庭科

好きな色：董、黒

つかさの姉。思考が普通で一番まともな人物かもしねれない。仲良くなると情に厚いツンデレ系。

高良 みゆき

(たから みゆき)

年齢：15歳

身長：162cm

出身地：東京都

誕生日：10月28日

血液型：O型

利き手：左利き

家族構成：父、母 長女

胸ランク：巨

好きなもの：茶碗蒸し、和菓子、勉強。

嫌いなもの：生魚、お医者さん

得意科目：無し

苦手科目：無し

好きな色：オレンジ

容姿端麗、成績優秀、品行方正な優等生だけど天然系な女の子。完全超人＆歩く萌え要素

山村 白緑

(やまむら はくりょう)

年齢：15歳

身長：150cm

出身地：愛知県

誕生日：6月6日

血液型：B型

利き腕：両手利き

胸ランク：大

家族構成：母、長女

好きなもの：林檎、カレー、音楽鑑賞、旅行、ゲーム

嫌いなもの：梅干し、ゴーヤ、海

得意科目：数学、英語、社会（地理、歴史）

苦手科目：無し

好きな色：白、緑、青

こなたとは幼馴染み。得意科目が多く、テストは常に満点に近い。漢検等を受験しており、中学卒業時点で、漢検準1級、英検1級、歴検1級、暗算10段を取得している。姉さんの的な存在。

プロローグ&登場人物（後書き）

読んでくださいましてありがとうございます。

「らき すた」 中心人物の4人+1人の物語です。今のところ中心人物+1人の紹介をしました。他の人々は出てきたときに前書きで紹介します。

第1話 蒼髪色の天使

桜の木につぼみが咲き始めた3月、春が近いことつげる。

私の名前は「山村 白緑」中学3年生で、後2週間で中学を卒業し高校へ入学し夢を求め続ける人や、家の家業を継いでいる方もいるはず。私は県内の高等学校に入学することがもう決まっている。私は自分の教室から外を見る。この教室もあと2週間でサヨナラだ、後は卒業を待つて入学を待つだけだが、私はその前に超えなければならぬ問題があった。

それは昨日のことになる。

妄想

私は普段どおり家に帰宅した。ところが、1つだけ変わったことがある、荷物が纏められていた。そして母もいた。私は母に聞いた「どうしたの？」

私は母に聞いた。母は間を置かず話した。

「白緑、悪いけど名古屋に転勤することになった。」

私は驚きで声が出せなかつた。

「後は1人で生きて行くのよ、卒業式まではいるから、」

妄想終了

私は後の事でいつぱいだった。料理は母から習つているため問題ないが、1人で生活するのがこんなに早く来るとは思つていなかつた。私は愕然して外を見ていた。この後どうしようか、その事でいつぱいだつた。その時

「どうしたの？」

私に聞こうとする優しい声、振り返るとそこには私より背が低く蒼い長い髪の女の子がいた。

「なにかあつたのみどりん？」

この子は「泉こなた」小学生の頃からの幼馴染で私とこなたは9年間同じクラスで、高校も私と同じ高校に通うことが決まつてゐる。

「うん、ちょっとね」

私はため息をついて「こなたから田をそらす。

「隠し事しないで、話して『じらんよ、みどりんが隠し事するなんてみどりんらしくないよ。』

私は再びこなたを見つめ、話した。

「母が名古屋に転勤する」ことが決まったの、「

するところなたは、

「そつか、みどりんお母さんしかいないのだったね、」

その言葉を聞いて私は驚愕した。

こなたも私と同じく両親の内片方しかいないのだ。こなたは、お父さんはいるが、お母さんはこなたが生まれた直後に亡くなつたそうだ。

私はまだいい方だ、お父さんは私が5、6歳くらいのときに交通事故で亡くなつている、性格、声はわかっている。

「それで、みどりんはこの後どうするの？」

こなたが聞く。

私は

「やつぱり一人暮らしかな、」

「一人暮らしは大変だよ、出来るの？」

「まあ大学に入るときは一人で生活することを決めていたからね、でもこんなに早く来るとは思わなかつたけどね、」

私は再び桜の木を見る。

しばらく間があきこなたが聞いてきた、

「それじゃあ私と同居しない？」

こなたがそう言つた。

「え？ いいの？」

「家族はお父さんだけだし、お父さんの許可が下りれば大丈夫だよ

！」

「うんでもね、」

私は迷つた、こなたの話は嬉しかつたけど、それでは泉家に迷惑が

かかる。でも私の友達は他の高校に行くことが決まつていて、同じ高校となるとこなたしかいないのだ。

「本当にいいの？」

私はこなたに聞いた。

「他に当たる所無いでしょ、だつたら私にたよりなよ、」

「それじやあ頼もうかな？」

私はこなたが天使に見えた。困つていた私を救つてくれたのだから。「オッケー、それじやあお父さんに伝えるから先に帰るね、」

こなたはカバンを持つて教室を出た。

私はこなたが教室から出るのを見送ると、再び桜を見つめた。

泉家自宅

リビングで話す、「こなたとお父さん

「なるほどな、」

「ね、幼馴染で唯一同じ高校に入るのに、これじやあみどりんが、かわいそうだよ！」

こなたは父に放課後の出来事を話した。

「まあ他に行く所がないのであれば、お父さんはかまわんがな、」

お父さんはそう話した。

「それじやあみどりんに連絡しないと、お父さんのOKが出たってね。」

その頃白緑は学校を出て、家路に着いた。

「こなたのお父さんどんな人かな？」

私は家に着くとポケットから鍵を取り出して、中に入らうとした時、

「プルルルル、プルルルル

電話が鳴った。こなたからであった。私は電話を取った、

「もしもし？」

「あ、みどりん？お父さんの許可が出たよ、」

「そう、ありがとこなた、」

「それじゃあまた明日。」

「うん、また明日。」

「ツー、ツー、ツ、ツ、」

電話が途切れで私は電話を置いた。

「まあこれで高校生活を迎えるわね、」

第2話 蒼髪色の血色

こなたと同居をすることを決めてから3日後、こつもとのよひに登校していた時、

「おーいみどりーん！」私は後ろを振り向かなくとも誰なのかすぐ分かった。

「おはようこなた、」こなたは私に追いかけて、

「あのね、お父さんの事なんだけど、お父さんみどりんに入る予定の部屋を掃除してたんだけどね、」

「へえー早いじゃない

「ンでね、掃除したら、お父さんの大学時代のアルバムが出てきたんだけどね、」

「よくあることじゃないの、」

「でもお父さん、掃除するの忘れて、アルバム見始めたの、」

「ひょっとしてお母さん？」

「そうなんだよね、私のお母さん、どんな人が解らないけどね、」

（へ？）

私はビックリした。お父さんから聞いてないのかな？

「お父さんから聞いてないの？」

「いや聞いてるよ、でもお父さんに何回聞いても『かなたはこなたそっくりだったよ』しか言ってくれないんだよね、何でかな？」

「・・・・・」

私は黙りこんだ、

親の心子知らずで言うのか、多分お父さんは話したいはず、でもこなたを悲しくさせないように言わないようにしているのではないかと、私は思った。

「まあ、知らない方が良い」ともあるんだから、もついにじゃない、

「

「みどりん、」

「こなたは黙りこんだ、みどりんは私とは違ひ物心着いた時にお父さんを亡くしているのだ、

「「ゴメンね」」過去を思に出せさせて、「

「いこよ、もう慣れてるし、気にしないで、」

その後私とこなたはアニメやゲームの話をしてくる内に学校に着いた。そして下駄箱に着いた時に

「ねえこなた、」

「ん？ なに？」

「本当に卒業してから畠つむりだつたけどね、同居しても良いかな？」

「えー？ どうして？」

「お母さんの転勤が明日に決まってね、明日から泊まる所無いんだよね、」

「そつか、それならOKだよ、」

こなたは親指を立てて言った。

「ありがとう、家具は明日に届くから、今は、寝る場所があればいいよ、」

「OK、それで何時に来るの？」

「お母さんが今頃、こなたの家に行つて、着替えと日常品を預けに行つてから会社に行くって言つてたから、多分一緒に帰ると想つよ、」

「やうなんだ、でもみどりんが私の家に来るなんて、中2の冬以来じゃない？」

「まあほんと私の家で遊んでたしね、受験もあつたし、（それ以前にこなたのやつているゲーム、あれを何とかしてほしいんだけどね、）

話している内に教室に着き授業が始まった。と畠つむり3年生全員受験を終えており、授業は午前中に終わった。

「みどりーん！ 帰らう、」

「うん、帰りましょ、」

私とこなたは学校を出でこなたの家に向かつた。
家に向かつている途中私はこなたに話をした。

「ねえこなた、」

「ん? なに?」

「私、こなたのお父さんと面識無いんだけど、どんな人なのかな知ら
ないんだけど、」

私はこなたのお父さんと面識が無かつたので聞いた。

「うーん・・・簡単に言つと、ロリコンなエロオヤジ」

「・・・・・・・・どんなお父さんなの?」

「言つた通りだよ、」

本当なのか半信半疑に思いながら、こなたの家に着いた。
こなたの家は1戸建ての2階建てで、私の住んでいた家はアパート
だったので、私に1戸建てに住むのが夢だった。

「ただいま!」

「お邪魔します。」

しかし家からは何も聞こえない、「お父さん出かけてるの?」
私が聞くと

「多分書斎じゃないの?」

「そう、それじゃあこなたの部屋貸して、私服に着替えるから、」
そう言つと私は玄関にあつた鞄を持っていき、こなたの部屋に向か
つた。

こなたの部屋は階段を上がって、真っ正面の部屋なのですが分か
つた。

ガチャ

こなたの部屋のドアを開ける、

「相変わらずす」「こなたの部屋ねえ、」

こなたの部屋には、フィギュアや漫畫本が沢山あり、まさしくオタ
クの部屋だった。

この部屋が幼馴染みの部屋だと思えない、

「・・・・・ 着替えるか、」

こなたの部屋を見渡した私は着替える」とこした。

ガチャ

「ねえみどりん」

こなたが入ってきた、

「ん、どうした?」

「お父さん、原稿出しに行つたみたい、2時には帰るって、」

「そうなんだ、」

私が答えると

グウー

「ほほう、今鳴ったのはこの腹か?」

こなたが私のお腹を摘まむ、

「うわっ!・・・・うんそうみたい、」

「それじゃあお昼にしようか、カツブ麺で良い?」

「私的には即席めんの方が良いんだけど、今日は仕方ないか、」

私とこなたは部屋を出てキッチンに向かった。

第3話 蒼髪色の父（前書き）

遅くなりました。自分の都合により投稿が1ヶ月遅くなりました。

第3話 蒼髪色の父

昼御飯を食べ終え、こなたのお父さんの帰宅を待っていた。
こなたはテレビゲームをして、私は勉強していた。

「ねえみどりん」

ゲームを止めて聞いてきた

「なに？」

私も勉強の手を止めた

「私が見る限り、何時も勉強しているけど、そんなに楽しいものなのかな？勉強って」

「まあ毎日やっているからね、楽しいと言つより、勉強しないこと、生活リズムが狂いそうで、」

「ぐ、狂うつて毎日どの位しているの？」

「うーん・・・・・・・・平均3時間はしているかな」

「さつ3時間！？よくもそれだけ集中して出来るね」

ゲームしている感覚と同じだと思つけどな、私は勉強をし始め、こなたもゲームを再開した。

午後4時30分

「よーし今日の分終わり」

腕を伸ばしリラックスする。

「にしてもお父さん遅くない？」

時計を見てこなたに聞く

「あつそりだね」

「何時に終わるつて言つてた？」

「遅くとも3時位には終わるつて言つてたけど

こなたが父からの電話の話を思い出す。

「都心からだとしたら電車で約1時間・・・もう着いている頃よね

？」

「そう・・・だよね

悪い予感がする、2人共そう思つた。

ブロロロー

「車？」

私、こなた共玄関に走る。

ガチャ

玄関の外には青い髪をした見た目40代の男性がいた。
えつ？ 誰？ ・ ・ ・ まさか

こなたの方を向く

「もう！お父さん、遅かつたね」

やつぱりーー！

「いやあ、すまん、会議が長くなつて3時30分にやつと終わつた
んだよ、それに電話したし」

「えつ？でも家の電話鳴りませんでしたけど」

私が口を挟む

「いや、家じやあ無くてこなたの携帯に掛けたのだがな」

「へえーそうでしたか」

こなたの方を向き睨む

「そういえば携帯何処だっけ？」

「あのねえ」

怒りをこらえて家中に入る

「これからお世話をになります、山村 白緑です。よろしくお願ひし
ます。」

「よろしく、話は聞いてるよ、成績優秀で運動神経が良くて」

「いえ、そんな」

思わず照れる

「刺激が強い物が好きなんだってねえ」

はぐあーなつ何で知つてるの？ ・ ・ ・ まさか、
「むいひー！」

こなたの首を持ち壁際に連れ込む

「こーなーたー！？何であんなことまで教えたの！？」

怒りのオーラが白縁から出ている。

「だつ、だつて本当の事じやん？みどりんの趣味は異常だもんね、
刺激

『go』

「もひ、もう言ひなー！それ以上言ひなー！」

はあはあはあ・・・

こなたが話している途中で無理矢理話を止めた、

「さて、こなた、今日はどうするんだ？もうそろそろ晩御飯の準備
したらどうだ？」

時計を見ると5時を回っていた。

「ぬあー！ そ�だ準備しなくちやー！」

慌てて台所に向かう、

「あつー！ 私も手伝つよ」

私も台所に向かつた。

PM 6：30

台所からはカレーの匂いが漂っていた。

パクッ

「どう？ 美味しい？」 ジャガイモとルーを味見

「うん！ 美味しい」

満面の笑みを出した、

「よーし後は30分煮込むだけ」

蓋をして、台所から去る。

リビング

「今夜はカレーか？」 父が聞く

「はいっ！」

「最初は肉じゃがの予定だつたけど、カレー粉の賞味期限が迫つて

たからカレーにしたの

「そうか、」苦勞様「

食事後

「あつあの、こなたのお父さん?」

「お父さんでいいよ、なんだい?」

優しい笑顔で聞いてくる。

「今日寝る所何ですけど、何処がよろしいでしょうか?」

そう、今日はもう遅いので、部屋の模様替えが出来ないのだ、覗いた時はまだ整理出来ていなかつた。

「私の部屋は?」

こなたが割り込む

「こなた? ネトゲーするでしょ? 明日休みだし」

「もちろん、あつみどりん明るいの嫌?」

自信満々に答えたが、シヨボンしている

「うん、私真っ暗じゃあ無いと眠れなくて」

「だとしたら、お母さんの部屋は?」

「いやあ、それだとお母さんに悪いでしょ? それにお父さんが絶対ダメだって言うに決まってるよ、ねえお父さん?」

お父さんの方を振り向く。

「お父・・・さん?」

考え方をしている用に見えた。

「ん? 何だ?」

どうやら聞いていなかつたみたい

「あついやその、私の寝る所がお母さんの部屋が良いじゃあ無いかなって事になつたのですけど、構いませんかね?」

私が話していた事を説明した。

「ああ構わないよ」

笑顔で答えた、

「あつがとひじれこまわ」

PM10：30

お母さんの部屋に布団を持ってきて、パジャマに着替えて、布団に入ればもう寝れる状態であった。

「これからお世話になります、山村白緑です。よろしくお願ひします。こなたのお母さん。」

こなたのお母さんの仏壇の前で挨拶をして、「もう寝ようかな?」「もう寝ようかな?」

布団に入り寝る体勢に入る。

21

PM11：20

「は～」

眠れない、他人の家だとなぜか落ち着かないな、

「トイレ行こ」

落ち着かせるためにトイレに向かう。

ジャーーー

「ふ～」

眠くなつてたし、もう寝よつ、
お母さんの部屋に向かう、

「あれっ？」

誰かいる。

蒼く長い髪、背が低く、誰か分かつた。

「ーー、こなたどうしたの？」

そう呟くと振り返り、

「えつ？あのー？私の事見えるのですか？」

「えつ？」

こなたじゃない、背丈、雰囲気、声の質はそつくりだけど、透けていて、よく見ると、はね毛（アホ毛）と右目の中下に黒子が無い、そして優しい瞳

「あっ、いやつ、見えるって、私の目の前にいますけど・・・」

「そう、やはりあの娘と私はやつぱり似ているのね・・・」

も、もしかして・・・この人・・・

「始めてまして、山村白緑ちゃん。私はそつくんの元妻、そしてこなたの母親の泉かなと申します」

その女性は優しく微笑んだ・・・。

第3話 蒼髪色の父（後書き）

今回より。「やーて次回の『みど すた』は?」（らき すた+白
縁の縁=みどり=みど すた）を行います。

「白縁です。」

「まさかこなたのお母さんが出てくるなんて、全く思っていません
でした。幽靈に分類されるかも知れませんけど、喋っていますので、
幽靈に分類されるのでしょうか?」

「次回『蒼髪色の母』」
お楽しみに、

第4話 蒼髪色の母（前編）

本日2回目の投稿です。

第4話 蒼髪色の母

「こなたのお母さん！？」

そんな・・・確かにこなたが産まれた後亡くなつたり・・・

「ふふ、そう君に遇うためなら私はどこでも現れるわ」

そつと私の唇に人差し指つける。

その行動に私はドキッとした。

・・・・・ははは、こんなに綺麗な人、私あつた事無いよ、絶対に男子はメロメロになるし、こなたのお父さんも惚れる訳だ・・・

私はかなたさんと向かい合う格好で座つていた。

「・・・こなたには本当感謝します」

「えっ？」

「・・・私が小学2年生の時、此処に引っ越して來た時、1番最初の友達がこなただつたんです。こなたと私が友達では無かつたら、私は名古屋の高校になつていていたかも知れないんです、・・・だからこなたには本当に感謝しているのです」

私がこなたと出会つた頃の話をしていると、

「それは・・・あなたが積極的にこなたに近づいたからではないでしょうか？」

「えっ？どうしてそれを？」

言つていな事が当たつており、ビックリした。

「言つたでしょ？私はいつもこなたを見ているって

「そう・・・でしたね」

私幽靈と会話しているんだよね？

それで冷静でいる私も驚きだよ…………ね？

「あの日から…………」

「？」

「あの日からいつも彼方からそつ君達を見守っていたわ…………」
あの日とは「くなつた日の事だろつ。

でもまさか、幽靈が実際にいるとは思わなかつた。2次元、3次元は作者が考えたことで、納得できるけど、実際私は全く信じないほうで、TVで神靈現象って言う特番でやつてているけど、「やらせ」、「HUG合成」と思つていた。……けど目の前にいるのは、もう10年以上前に亡くなつた人、話している事を否定する]こともできない。……幽靈だと思うしか無い。

「あの時、そつ君、たくさん泣いて…………見てられなかつた」

「…………そりやそうですよ。大切な人がもう会えないのですから、…………もうあの笑顔も、怒つた顔も、泣いた顔も見れないですから…………私も経験しましたから、お父さんの気持ちも分かるんですよ…………でもその時、こなたは小さかつたらしくてかなたさんのこと も…………」

私は言葉を詰まらせる。

「…………いいのよ。そつ君が元気に育ててくれたから」
そつと微笑みを渡す。

それが私には寂しそうに見えた。

「それにあなたと出会つてからあの娘、前より明るくなつてると思

うの、だからありがどつ」

「い、いえそれは私の方です。こなたのおかげで此処までこれたのですから」

照れながら私は頭をかく。

「でもこなたとであつたあの日に、私が積極的に声をかけなかつたら、私はこなたと一緒に生活できなかつたつと思うと、声をかけて良かつたと思います」

「そう・・・あなたは優しいのね」

「え?」

優しい?

そういうえば一昨年の夏、鷺宮町の夏祭りに行つた時にぶつかつた子の財布を正直に教えた、「あなた優しいのね」と言われたつけ、「自分じゃわかつてないと思うけどそれはあなたの長所だから大切にしてね」

この細く包む声、懐かしく感じた。私のお母さんと雰囲気が似ていた。

「じゃあ私はいくわね」

「え、こなたの顔を見なくていいんですか?」

「ええ、白縁ちゃんと話せただけで楽しかったから」

「そう・・・ですか」

いまいち納得出来なかつたけど、かなたさんが望まない以上じょうがないことだ。

私は潔く引いた。

「じゃあさようなら」

かなたさんが消えていく

「かなたさん!」

私が叫ぶとかなたさんは微笑みを見せ消えていった。

ガバッ

「かなたさん!」

チヨンチヨンチヨンチヨン

「えつ?」

窓からはまぶしい光が差し込んで来て朝である」とを表していた。

「今のは夢だつたのかな?」

携帯の時計を見るとAM6:29だった。私の起床時間である。

「曖昧3センチ そりやぷにってコトかい？ ちよつー・らつぴんぐ
が制服・・・だああ不利つてこたない ふ。がんばつぢや やつち
やつちぢや そんときやーっち& Release ポップ 汗
(フロ) フロ (フロ) の谷間に Darwin darwin
FREEZE!..」

目覚ましに設定した曲名が流れで止める。

「あれは・・・夢だったのかな？」
回りを見渡しても、昨日とあまり変わらない。やはり夢だったのか、
「さて朝ごはんにしようか」
お母さんの部屋から出て台所に向かう、
その後ろで、薄つすら人の影が、
「つふふふふ・・・」
そして、綺麗な笑い声

第4話 蒼髪色の母（後書き）

それで次回の『みどりすた』は？

「田縁です。」「こなたです。」

「まさか、みどりんがアニソンへれてるとは思わなかつたよ」

「そつち？お母さんのほうじやなくて？」

「そりゃーお母さんの方もビックリしたけど、アニソンの方がびつ

くりしたよ、だつて『もつてく』」

「はーストップ！次回予告なんだから、レコードストップ！」

「はいはい」

「「次回、『蒼髪色家の日常』」」

お楽しみに、

第5話 蒼髪色家の日常

AM7：30

はぐりょう

台所にて朝食の準備
無論エプロン姿だ

「よつとー」「よみ

調理してこると、

「おはよう」

お父さんが台所に顔を覗かせた。

「おはようございます」

「エプロン姿が似合つね？」

「いえ・・・・それほどでも・・・・・」

思わず照れる

「何時、起きたんだ？」

「6時30分です」

「結構早いなあ？土日何だからもう少し寝てれば良いの？」

「私は1年、365日、同じ時間には起きて寝ています」

「えっ？ 大晦日もか？」

「大晦日も・・・・そうですね、22時30分には寝ました」

「今年は？」

「私の友達に神社を受け持っている友達が居て、一昨年はそこで巫女の手伝いをしました。今年は受験があつたので、行きませんでした」

本当は行きたかったのだけど、田標の高校に行くために、あの時は毎日勉強漬けだったなあ、

「・・・・・巫女ねえ？」

薄つすら笑っていた。

「（なつ？なにこの人？なんで笑っているの？）」

そういうえば、こなたの趣味の現況はお父さんだつたよね？
つと言つことはこの人《お父さん》もオタクかあ？

「んつ？」

なんか焦げ臭い・・・

「あーーーしまつた」

玉子焼きが焦げかけていた

カツチ

「なつ何とかセーフかな？」

焦げかけていたが、食べれない事もなさそう、

「うーん・・・食べれない事も無さそうだしなあ？良いんじゃあ
ないか？」

「つほ・・・」

よかつた

「（失敗した姿も萌えるなあ？）

また薄つすら笑っていた。

私はその姿をみて思わず引いた。

「（何でかなたさんはこの人と結婚したのかなあ？）

そう思つていると、階段の音がした。

「こなた起きたかな？」

「おはよづーーー」

かなり眠たそうだ

「おはよう、眠たそうね？何時に寝たのよ？」

「いやー時計で見た限り、3時までは起きてたかな？
マイペースで話すこなたに対して

「・・・・・しつ信じられん

私は引いた

「(・・・)の家族には本当に驚かされる」

AM7:45
リビング

私とこなたとお父さんで朝食を取ることで、
メニューは白御飯、玉子焼き、若布と豆腐の味噌汁、ソーセージ
おかずはすべて私が起きて作ったものだ。

3者そろって合掌し

「「「いただきます」「」」

私の作った朝食に手をつけたこなたとお父さん・・・、「どうだらう
?・・・・おいしいかなあ~?

「あつあの~おいしいですか?」

「うん!~うまい!」

「私が作るより上手かも!」

「本当!~?・・・お世辞じやがないよね?」

「『私が作るよつ』はお世辞」

「・・・へつ?」

「こなた・・・今・・・私の空氣ぶち壊したよ・・・?」

「でもちゃんとおいしいよ!」

こなたの笑顔がそれをものがたつていた。

「・・・・・・ありがと、こなた」

照れながら言う私に、

「みどりんつてシンデレ駆るんだるよね?」

また私の空氣、ぶち壊したよ・・・、

私の新しい部屋の掃除を終えると、都合よく私の荷物が届いた。

荷物はダンボール5つ分

1つは小さいタンスが入っていて、その中に洋服が入っている。そしてもう1つは夏服や浴衣が入っている。

残り3つは・・・・、本とか私の日常的に必要な物がたくさん入っている。

荷物が少ないので、引越し前に整理したからだ、まずタンスを運ぶことにした。

「けつ結構重いね？」

「そりゃあ服が入っているからね」

こなたと2人がかりで運ぶ。

お父さんは、「見られたくないものがあるから、お父さんはなるべく手伝わないと欲しい」と言つたら、悲しむかのように書斎に消えて行つた。

「でもなんでお父さん戦力外したの？」

「・・・そつそれは・・・・もう・・・きてるからよ・・・」

恥ずかしげに答える私

「あ～なるほどね、そりゃーお父さんは見られたくないよね～？」
答えが分かつたようだ、

「特にこれは・・・見られたくない」

腰のポケットから見られたくないものを取り出しました元に戻した。

「何時から来てるの？」

「中学2年の夏からだから・・・・、1年半かな？」

思えばそんなに経っているのか・・・・、

「そつか」

軽くスルーされた。

「こなたは？もう来てるの？」

私が聞くと・・・・、

「それがまだなんだよね～？やっぱりこの体系だからかな～？みど

りんが「うらやましいよ」

じーっと私を見つめる。

「でつでも来ると大変よ、長いと2週間近くは続くし・・・」

「そつなんだ・・・」

やつぱり体験したこと無いようだ。

「さてと、ここに置こうか?」

位置は泉家にあるタンスの真横

「そうね! そこにおいてくれる?」

私がOKを出すとこなたはタンスの横に置いた。

「後は小さいダンボールだけだね?」

「そうね、後はダンボール4つだけね」

私とこなたは1階に降り、残った荷物を取りに向かう。

「重つ! ?なにが入ってるのこれ?」

こなたは格闘技経験者で結構体力には自信があるのだが、持ち上がる様子は無い。

「あ〜、それは結構重いかも、2人で運ぼう?」

「うん」

2人で運ぶが結構重い、

「(詰めすぎたかな?)」

部屋に着き、運んできた荷物を置き、

「中見てもいい?」

「だめよ! まだ荷物があるんだから、全部運んでからよ」

私が怒り気味で言つと・・・

「えー? いーじゃん? ちょっと位見せてくれたつてさあ〜?」

背中にへばりつかないでくれよ・・・・・・、

「だあ一分かつたから離れなさいよ、中身は漫画本よ、その本棚に並べといてね」

部屋から出て1階に行き荷物を取りに戻る。残る荷物は3つ。その内1つを手に取り、階段を上がる。

「こなたのことだから、漫画見てるだろうなあ?」

階段を登りきり私の部屋に入る。

「あつあれ？」

しかし、私の部屋に着いた時私の目に入ったのは、漫画を棚に並べるこなたがいた。

「ん？ どうしたのみどりん？」

「あついや、こなたの事だから漫画見てるかな～？」と思つて・・・

・

予想外の展開に戸惑う私

「いや～見ようっと思つたけど、どれも持つてるやつだしさあ」

「（そうだった、こなたはいっぱい漫画持つているんだった、だからこなたが持つていらない漫画本なんて私は持つていない）」

「どうしたのみどりん？」

「な、何にも」

その後は残りの荷物を運び、荷物を出して、配置して無事終了した。

終了後

「君にめぐり合えたそれが奇跡～！」

自分の部屋でイヤホンをつけて大好きな音楽を聞きながら歌つていた。

「楽しそうに歌つてますね～？」

「うひゅう～？」

歌つていた所を見られていた事は・・・内緒にしておきたい。

第5話 蒼髪色家の日常（後書き）

それで次回の『みどりすた』は？

「はぐりょうです」

「まあこれで、私も泉家の一員なのよね？」

「（歌つている所見られたくなかったなあ、すつじく恥ずかしかった）」

「次回『別れと再会』」

お楽しみに

第6話 別れと再会（前書き）

新しい登場人物がいますので、紹介します

富山 みやな

(とやま みやな)

年齢：15歳

身長：144cm

出身地：北海道

血液型：AB型

家族構成：父、母、長男、次男、長女

胸ランク：中

好きなもの：麺類、冬、雪、ゲーム

嫌いなもの：夏、車

得意科目：体育以外

苦手科目：体育

好きな色：虹

家はすすき野のラーメン屋（テレビで時々出ている）
はくりょうとは4年前のゲーム大会以来の知り合い。
将来は自分の家のラーメン屋を継ぐ予定。

第6話 別れと再会

火曜日

今日は中学の卒業式

学校の教室

「今日で眞とお別れかあ」

「まあこなたとは高校も一緒にね」

こなたと話す私

今日でこの学校ともお別れである。

この教室から見る桜の木ともお別れである。

時間は経つて卒業式終了後

「いやー不思議なカンジはあるけど、思つてたより特別感動するこ
ともないねえ」

「普通そうだしょ？」

私はそれなりにジンときたけど

「だつてほり、漫画とかだと卒業式って『感動のクライマックス!』
ってカンジじゃん? 何があるかもつて期待しちゃうんだよねー」

「まあ解らないでも無いけど」

「何かこの調子だとまた数年後にはよく覚えてなさやつな気が・・・
ネ?」

「『ちやんと覚えてるー』って言いたいけど、言われてみると私も

小学生の卒業式余り覚えていないよー?」

その後こなたと遊んだのは覚えているけど、あれ?

「ところでみどりんこの後の予定は？」

「何にも？こなたと一緒に帰るだけよ」

「（くそつーみどりんめえ・・・せつかく中学生生活の最後に彩を
と思つて偽のラブレターを仕掛けたのに・・・あの様子だと机の中見てないなー？）

めちゃくちゃつまんない！！

「な、なによ？」

こなたは不満そうだが、はくじょうは全く気がつかなかつた。

そんなこんなで卒業式を終え、泉家に帰宅した。

その夜

リビング

「春休みだし、たまにはランドでも行くか？」

お父さんがそういった。

「あつあのー？大変嬉しいですけど、私明日行くところがあるので
「行くところ？何処に行くの？」

「北海道」

はくじょうがスラリと言つた。

「・・・」

2人共開いた口が塞がつていない

「あついや！そのー、友達の所に行くだけで、心配しなくても良い
ですよ！費用はすべて私が持りますし

あわてて話す。

「とつ友達って誰？」

「4年前に知り合つた友達よ。一昨年は向こうが此処に来たから、
今度は私が行くわけ

「なるほどなあ

「もつ勿論お土産買つて帰るからね

「うん、楽しみにしてるよ」

翌日

8：00

玄関

「それじゃあ行ってきます」

「「行ってらっしゃい」「」

こなたとお父さんに見送られて家を出た。

その後電車を乗り継いで県の中心駅に向かう。

県の中心駅から新幹線と特急2本を乗り継いで北海道の大都市札幌に着いたのは、出発してから11時間以上経った19時前だった。

「寒い！』

雪も降っている。

『確かに改札出た所で待っている』って言つてたからとりあえず改札に行こう』

エスカレーターで下に行き改札に向かう。

改札に向かうと声が聞こえてきた。

「みどり！？」

この声、それと私の事を『みどり』と呼ぶ人は1人しか居ない。

「みやな！？」

近づくにつれて本人と確信した。改札を出てみやなと抱き合つた。

「久しぶりだねみやな！？」

「うん！－久しぶり」

抱き合ひのを止めて向き合ひ。

「また縮んだんじや無い？」

「もお！それは禁句！みどりが伸びたんだよ～！」

背はこなた同じ位の身長。

でも私と同じ歳。

「じめん、じめん」

「んもー、それは置いといて
置いといて良いのか？」

「よつこそ北海道へ」

「うんっー」

「さつ私の家に行こう」

外に向かう。

みやな家の駅の近くらしく、歩く事にした。

「みどり、北海道の印象は？」

「やつぱり寒い事かなー？雪も降つているし、此方（埼玉）では滅多に降らないし」

私は雪を田の当たりにしたのは初めてだつた。
喋つているうちにみやな家の着いた。

「じー、こーがみやな家の家？」

「うん、そうだよ」

そこは大きなラーメン店だつた。しかも長い行列ができるている。

「裏口から入るっ」

「う、うん」

私とみやなは店の横にある脇道を通つて裏口から家に入った。

「ただいま～」

「お、おじゃまします」

玄関を入れるとそこは厨房だつた。

邪魔をする訳にはいけないので2階に行く事にした。

「なに食べる？」

みやなはHプロンを着始めた。

「うーん・・・・それじゃあ店のオススメをお願いしようつかな？」

「わかった」

そういうとみやなは下に降りていった。

10分後

「お待たせ」

みやなが御盆にラーメン鉢を乗せて上がつて來た。鉢からは湯気が上がつていた。

「うちの店のオススメのみそラーメンです」

おいしそ〜

「いただきまーす」

ズズズーズズ

「おいしい?」

「うん!おいしい」

その後軽くラーメンを食べ終えた。

その後は2人でテレビを見たり、ゲームして盛り上がつた。

PM10:00

みやなが疲れた顔をして上がつて來た。

「ふあー」

「ど、どうしたの?」

「うん・・・、眠い」

「そう・・・もう寝るの?」

「うん、一緒に寝よつ」

「いいよ」

パジャマに着替えてみやなの部屋に向かつ。

翌日

私とみやなは朝市に向かいお土産を探していた。
迷った挙句、海産物を冷凍便で送ることにした。

お昼からは市内を観光して1日を終えた。

その翌日

AM10:35

この日には帰る予定になつていた。

みやなが駅のホームまで見送ってくれた。

「次、いつ会えるかな？」

「多分近い内には会えると思うよ」

「？」

私には何のことだか分からなかつた。

理由を聞いて私は納得した。

列車の扉が閉まり発車した。

駅から遠ざかり、みやなが見えなくなつて行く。

みやなは手を振つていた。

PM9時前

ようやく家の最寄駅に着いた。

改札を出るとこなたが迎えに来てくれていた。

その後無事に家にたどり着き、遅い夕食をとつた。

ちなみにその後でお風呂上がりに体重計に乗つたら、体重が キロ増えていた事は・・・内緒の話です。

第6話 別れと再会（後書き）

それで次回の『みどり』は？

みやなです。

ようやく出番がきました。

正直嬉しいです。

次は入学式です。

天然とツンデレ、歩く萌え要素がよつやく出でてくるんですね？

次回『入学式』

お楽しみに

第7話 入学式（前書き）

また新たな登場人物が出ます。

黒井 ななこ

(くろい ななこ)

年齢：25歳

身長：171cm

出身地：神奈川県

血液型：O型

利き腕：左利き

家族構成：1人暮らし

胸ランク：大

好きなもの：枝豆、ロッテ、ゲーム

嫌いなもの：しいたけ、中途半端な延長、臨時メンテナンス

好きな科目：世界史

嫌いな科目：英語

好きな色：白

こなたのクラスの担任。生徒を友人のように接する先生で、ややい
い加減な性格だが、授業は真面目に行つ。

天津 冬美

(てんしん ふゆみ)

年齢：24歳

身長：159cm

出身地：栃木県

誕生日：4月4日

血液型：B型

利き腕：両利き

家族構成：父、母、長男、長女、次女

胸ランク：中

好きなもの：サスペンスドラマ、漬物

嫌いなもの：車、オカルト、ホラー

得意な科目：数学

嫌いな科目：国語

好きな色：黄緑

はぐりょうのクラスの担任。教師であるが、リーダー性が無い。しかし運動会や文化祭等の行事にはリーダー性が強く、気がつけば生徒に混じっている事がが多い。

P・S（作者より）

実際のらき すたとは違っています。

私が書いた中では最も長いです。

第7話 入学式

4月1日

AM7：30

今日は私の通う高校『陵桜学園』の入学式。

私は陵桜学園の制服に着替えて、入学式を楽しみにしていた。

力チャ

「あはよ~」

こなたが扉を開けて入ってきた。こなたも陵桜の制服を着ている。

「今日入学式つて事忘れていなかつたわね？」

「私だつて入学式位、忘れないよ」

「それじやあ行こ~か？」

部屋を出て、階段を下りて、玄関に向かう。
靴も指定靴なので、その靴を履く。

「おはよう」

「おはよ~」やこます

お父さんがリビングから出てきた。

「いよいよ今日が入学式かあ~？」

「はい、一時はどうなるかと思いましたけど」

「私に感謝したまえ~」

まあそれは感謝しているけどね

「それじやあ行つてきます」

「いつてらつしゃい」

家を出て、家の最寄駅に向かう。

電車はなぜか混んでいたなく座る事にした。

陵桜学園は私とこなたの最寄駅から電車で20分、そこから歩いて5分程かかる場所にある。

学校の最寄駅に近づくに連れて、同じ制服を着た人が多くなつてきた。

そして最寄駅に着き私達は列車を降りた。

改札に向かう途中。

トン。

こなたが都心から来た人とぶつかつた。服からみて、陵桜の男子の服を着ていた。

「おつとごめん」

人とぶつかつたが、こなたは倒れなかつた。

「平氣だよ」

じーーー・・・・・

「？」

こなたがぶつかつた相手をじーっと見ていた。

「な、なに？」

「同じ高校・・・入学式・・・男子とぶつかつた・・・これフラグたつたかな～？」

「・・・・・は？」

「（ちょ、こなた・・・初対面の人に一部の人にはしかわからないことを・・・そろそろ教育が必要かな～？）」

「・・・フラグ？」

「そう！入学早々こんな出会いがあるなんてね～・・・・・着いてるよ～」

ブチ！！

私の何かが切れた。

バキヤ！

こなたの頭を殴る。

「あいたたたた~」

殴つた所を抑える。

「それが初対面の人と言つ台詞ー? ほら行くわよー!..」

こなたの腕をひっぱり改札に向かう。

「ちょ、ひっぱらないでよ~、暴力反対! ! !」

こなたは困つているようだけど、お構い無しにこなたの腕をひっぱる。

改札を出ると

「みどり~」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「おはようみやな」

なんとそこにいたのは1週間前に北海道で再会したみやながいた。
しかも陵桜学園の制服を着ている。

「おー、君がみどりんの話してた子かあ?」

「それじゃあみどりが話してた子つて?」

「うん、そう」

話は1週間前みやなと分かれる時まで遡る。

「ど、どひこひ」とみやな?』

「私ねえ、両親共に陵桜出身なんだ」

「私が行く高校の?」

「それでねえ、幼い頃から陵桜の話とか聞いて、『通いたい』の思いがあつたの」

「そ、それで？」

「それでね陵桜を第1希望にしたんだ」

「そうなんだ」

「学校は『決めるのは本人次第』、家も『行きたかったら行つてきな』って事で通う事にしたの」

「な、なんという偶然」

私も両親共陵桜出身、幼い頃から話を聞いて『通いたい』つと思つていた。

「でも、親から離れるから……」

「うん1人暮らし、家賃、電気や水道代は親が払ってくれるけど、『食費やその他は自分で稼ぎなさい』って」

「それってバイトって事だよね……？」

「うん大変だと思うけど、みどりが一緒なら楽しいと思つし」

「うん、私もみやなど一緒になら楽しい高校生活になるとと思つよ」

振り返り終了

＜通学路＞

「友達が増えて私嬉しいよ」

「私もよ。あつ自じ紹介してなかつたわね、私は富山みやな。みやなつて呼んでね」

「私は泉こなた。こなたでいいよ」

話しているうちに陵桜学園に着いた。

陵桜学園は1学年12クラス×1クラス40人＝480人といふマジモス高。

私とこなたのように近場の人や、みやなのように遠い所から来てい

る人もいる。

私達はクラス分けの前にいる。しかし・・・

「やつぱりすごい人ねえ」

私たちの前にはクラスが何処か確認しようとしている人達で一杯だ。
「まるでコミケだね～？」

「こなた？また教育が必要か？」

私は拳をこなたの前に見せた。

「うわ～みどりん凶暴！！」

「ねえみどり、コミケってなに？」

「みやなは知らなくてもいいよ」

「？」

「しょうがない、捶き分けて行くか？」

「そうするしかないみたいだしね」

私達はクラス分けの前に群がっている人を捶き分けてクラス分けの名前が見える範囲まで来た。

「それじゃあ私はあつちから見てくるね～」

こなたはA組の方に向かった。

「それじゃあ私達はこっちから」

私とみやなはM組の方に向かう。

M組から見る事にした。

M組には私達の名前は無かつた。

順にK組、J組、I組、H組を見たが、私達の名前は無かつた。

そしてG組

「あつ！私の名前！！」

みやなが喚起の声を上げた

「え？わ、私の名前・・・」

あわてて探す。

「あつたよ！みどり！！」

再びみやなが喚起の声を上げた

そこには『山村 白緑』の名前があった。

「ほ、本当だ！」

喚起の声を上げた

だけどそこにこなたの名前は無かつた。

「こなたの名前無かつたね・・・」

「うん・・・・」

私は落ち込んでいた。

こなたとは小学2年から同じクラス、まあ1-2クラスあるので同じクラスになるのは奇跡に近い。

その後こなたが戻つてきた。

「私D組だつた・・・・」

「そう・・・・」

2人共落ち込んでいた。

「ほ、ほら2人共元気だして！-！」

「まあこれで、宿題写す時ばれなくなるから、私はちょっと嬉しいけどね」

「突つ込みづらい雰囲気の時に余計な事いうなつ！-！」

「（こなたつてKYなんだ・・・・）」

こなたはD組、私とみやなはG組だつた。

「それじゃあ私達は教室に行つてくるから」

「いつてらっしゃい」

2人を見送つた。

「さて、私も行きますか」

振り返ろうとした時、

トン！

誰かにぶつかつた。

「す、すいません！大丈夫ですか？」

「（さつきぶつかつた人とは口調が違う・・・それになんといつて

も胸の大きさ……明らかに女子だね……」

見上げると眼鏡を掛けていて、髪は胸の辺りまであった。

「大丈夫だよ、ちょっと悔しいことがあってね」

「そういえば誰かと一緒にでしたよね？駅から？」

やさしい口調……大金持ちっぽいね……

「うん、小学校の時から同じクラスだったんだけど、別のクラスになっちゃって……」

「小学、中学同じクラスですか？それはすごいですね？」

「そうだけど、んまあ12クラスあるから、同じになる」とすら奇

跡だけどね？」

「そうですね。あ、自己紹介が遅れましたね。私高良みゆきと申します」

「私は泉こなただよ、クラスはD組だから」

「よろしくおねがいします泉さん」

「よろしくみゆきさん」

あれ？なんで『さん』付けしたんだろう？雰囲気かな？

みゆきさんと別れてこなたも自分の教室に向かつた。

▽D組教室>

「なんで『さん』付けしたのかな？」

みゆきさんって結構ナイスバディだつたなあ～

「また会いたいなあ～」

ふと教室の廊下を見るとドアが開いた。

「み、みゆきさん？」

なんとつこさつき出合つた人が教室に入ってきた。

「あら、泉さん」

「ど、どうしてここに？」

「私もD組なんですよ」

「そ、そなんだ……」

「1年間よろしくお願ひします」

「うわうわよひしきくね」

〈その頃G組教室〉

「こなた多分1人で寂しつがてるでしょうね?」

「そうかもねえ~」

「しょうがない、のぞいてやるか?」

「そうね、時間もあるし」

2人でD組に行く事にした。

〈D組教室前〉

「多分教室の窓から外を見ると思ひみつけよ?」

「こなたつて寂しがりやなんだ?」

「うん、普段は元気すぎるんだけどねえ」

ガラツ

教室の扉を開ける。

「こな・・・・・た?」

そこには誰かと喋っているこなたがいた。

「もう友達できただあ~?」

「そう・・・・・みたいねえ?」

なんで私の思つて いる事と違う展開になるんだろう?

「おーみどりんにみやなちゃん、来てくれたんだあ~? こなたが私達に近づく。」

「うん」

「それよりもこなた、あの人は?」

「こなたと喋っていた人を指差す。」

「あつ私、高良みゆきと申します。貴女は確か駅で泉さんと御一緒にいたね？」

「えつ？どの当たりから見ていました？」

「泉さんを殴つた当たりからでしょうか？始めは中の良い姉妹に見えました」

「し、姉妹？私とこなたが？」

「ええ、本当に姉妹に見えました」

「（私とこなたが姉妹に？とても私には思えない・・・）」

「みゆきさんは1人っ子で、姉妹が羨ましいんだってえ～」

「へえ～みゆきも1人っ子なんだ？」

「え？ということは貴女も」

「ええ私もこなたも1人っ子なの」

「（同じ1人っ子でもこんなに差があるんだ・・・）」

みゆきは明らかにナイスバディでなんだか優しそう。こなたは幼児体系で毒舌でオタク。私は・・・どうなんだろう？

「あつ自己紹介が遅れたね、私は山村はくじょう、はくじょうは白緑つと書くわ、よろしくね」

「私は富山みやな、よろしくね」

「山村さんに富山さん、こちらこそよろしくお願いします」

その後色々喋つている内にチャイムが鳴つた。

「それじゃあ私達は戻るから、次の休み時間また来るから」

「じゃあね～」

私とみやなはD組を後にしてもG組に向かつ。

<廊下>

タタタタタタ

向こうから走る音が聞こえてきた。

「ほら！走つて！！」

「待つてよお姉ちゃん～！」

「（姉妹・・・それとも双子かな～？）」

1人はライトパール色の髪にショートカットで黄色のリボンをしている。

もう1人はこちらもライトパール色の髪にロングヘアでツインテールをしている。

まあ今は無視しておこう。

〈G組教室〉

教室に入ると既に先生が来ていて、私達以外全員座っていた。

先生は女性だ、

「その2人、座つて」

「は、はい」

あわてて座る。

「私が1年G組担任の天津冬美です。1年間よろしくね」
まず先生が軽く自己紹介した。

〈その頃D組教室〉

「先生遅いなあ～」

「もうチャイム鳴つてますよね？」

クラスがざわついてくると何だか足音つて言つか走つてくる音が聞こえてきた。

・・・ダダダダダダダダダッ！ガラッ！

「皆席に着け～！ハアツハア、間に合つた～。」

明らかにアウトでしょう。

「つかがの組担任の黒井や。まだ春休み気分が抜けんようやけど休み氣分でおひんで頑張るよ！」
ドンッ！

机に倒れ掛かつた。

（うわつ説得力ない！）

多分クラス一同そう思ったことだらうね。

先生の髪はボサボサだし明らかに先生が遅刻寸前だったようだし。

その後体育館に移動し、入学式を行つた。入学式恒例の長い校長の話を終え、入学式が終了。クラスの戻つた。

＜G組教室＞

「早速ですけど、上半期のクラス委員長を決めたいと思います。誰かいませんか？」

「みどり確かに中学校の時学級委員長をやつていなかつた？」

「山村さん引き受けくれませんか？」

みやなの話しが聞いた先生が聞いてきた。

「別に私は構いませんけど・・・」

なぜか自動的に私が上半期のクラス委員長をやる事になってしまった。

まあ私は嫌ではないんだけど・・・

「私が学級委員を受け持ちました山村白縁ですよろしくお願ひします」

前に出て軽く挨拶した。

パチパチパチパチ

拍手が鳴り、少し照れる。

その後HRで無事クラス委員が決まって残った時間は、フリータイムとなつた。

放課後

D組教室

「へえ～みゆきがD組の委員長なんだ？」

「はい、委員会でもよろしくお願ひします」

なんとD組の上半期の委員長はみゆきだつた。

「でもなんで委員長することにしたの？」

「小中と学級委員を受け持つていまして、それでやつてみようかと思いまして……」

な、なんという偶然……私も中学時代、学級委員を受け持つていた。

それをみやなが喋つてやること……まあ嫌つて言つわけではないけど……

「そろそろ帰るつか？」

「そうですね」

私達4人は帰ることにした。

＜通学路＞

バスも通つてゐるけど、みやなのが近いので、歩く事にした。

その最中、

「あれ？なんだろ？？」

「ん？」

30m程前に私達と同じ陵桜の制服を着た女の子2人と外国人っぽい男性がいた。

よく見ると今朝廊下ですれ違つた2人だつた。

「まさか誘拐?」

「こなた考えすぎー多分道を聞いているんだと思つけど・・・英語喋れないのかな?」

私達は女の子2人と男性の元に近づく、

「お、お姉ちゃん、なんて言つてゐるのかな~?」

「た、多分道を聞いているんだと思つけど・・・え・・・え~と」

はくりょうが割り込み英語で『どうかしました?』と聞く、

男性は『近くにコンビニはありますか?』と言つた。

男性はコンビニを探していよいよだ、
みやなの方を向き、

「みやな、近くにコンビニある?」

「うひ~めん、まだ住んだばかりだからこの辺の事はまだ知らないの」

再び男性の方を向き、

『すみません、この辺のことは知らないので』

『そうか、それじゃあ別の人へ聞きます』

『すみません、お力になれなくて』

『別にいいよ』

男性はその場を去つた。

「す、すごーい!」

ショートカットの子が喚起を上げた。

「山村さんすごいですね?」

「べ、別に私は当たり前の事をしただけで・・・」

照れて顔が赤くなる。

「またあ～、みどりん照れちゃつて　」

「う、うるさい！！」

正直嬉しいけど・・・、

「みどりは英検1級の免許を持っているんだよ

「それはすごいですね」

「あ、ありがとう」

「助けてくれてありがとう、私は柊かがみ、こっちは妹のつかさ」

「始めてまして」

女の子2人が挨拶をした。

「私は山村はくりょう、はくりょうは白緑と書くわ、この子が私の友達のこなたとみやな、そして今日知り合つたばかりのみゆき、よろしくね」

「よろしくね」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

私達も挨拶した。

その後みやなとは途中で別れ、みゆきさんは東京方面らしく駅で別れ、その後柊姉妹と別れた。

そして家の最寄駅に着いて降り、そのまま家に向かつ。

「　「ただいま」」

「　「おかえりどうだった？」

「友達が3人出来たよ」

こなたが指を3本出して顔は笑顔があふれている。

「　「そうか、それはよかつたなあ、ご飯できたから着替えておいで」

「　「はーい」」

私とこなたは2階に上がり、それぞれの部屋に入った。

「はくじょうの部屋」

「春は出会いの季節とは言ひナビ・・・」

着替えながら今日のことを振り返る。

入学式の日にクラスとうまく馴染めたし（委員長でいろんな人と話したため）、それに友達が3人も出来た。
悩みは終姉妹をどう呼ぶかだけど・・・、普通につつかとかがみで良いよね？

まあ呼んでいれば慣れるか。

これから高校生活、楽しくなりそう。

着替えを終え、下に降りて行つた。

第7話 入学式（後書き）

さて、次回の『みどりすた』
かがみです。

いや～ようやく出番が来たか、
たく、作者の更新遅すぎるのよー。
つて、文句言つてると出番少なくなりそつだかいいの邊で止めとく
か、

あれ？あの子どこかでみたような・・・

次回『2年ぶりの再会』

お楽しみに

第8話 2年ぶりの再会（前書き）

新たな登場人物がいるので、紹介します。

峰岸 あやの

(みねぎし あやの)

年齢：15歳

身長：160CM

出身地：埼玉県

誕生日：11月4日

血液型：AB型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長男、長女

胸ランク：中

好きなもの：お豆腐、餃子

嫌いなもの：辛いもの、煙草の煙

得意科目：国語

苦手科目：数学

好きな色：黄緑

かがみと同じクラス。中学時代は茶道部に所属していて、和服が似合つ大和撫子。白縁とは、2年前に面識あり。

田下部 みさお

(くさかべ みさお)

年齢：15歳

身長：162CM

出身地：埼玉県

誕生日：7月20日

血液型：B型

利き腕：左利き

胸ランク：中

家族構成：祖父、祖母、父、母、長男、長女

好きなもの：ハンバーグ、ミートボール、太陽

嫌いなもの：こんにゃく、野菜、雨

得意科目：体育

苦手科目：世界史、数学

好きな色：黄色

あやの同様、かがみと同じクラス。中学時代は陸上部所属で、太陽
が似合う女の子。あやのをよく頼つている。

P.S（作者より）

テストや事情により更新が遅れました。

第8話 2年ぶりの再会

入学式から1週間

柊姉妹の呼び方はつかさ、かがみと呼ぶ事にした。
つかさ、かがみも私の呼び方を決めたよつて、つかさは『みどりちゃん』、かがみは「はくじょう」と呼ばれる事になった。

＜学園最寄駅前＞

「お～す」

「おはよっ」

つかさとかがみが来た。

すでに私とこなた、みゆきは来ていた。

「「おはよっ」」

「つかせさん、かがみさん、おはよっ」わこます」

私とこなた、みゆきがはもる。

「あー、みどりちゃんポニー テールにしたんだ！」

「うん」

「でもどうして？」

「まあ単純な理由で……」「みどりんが好きな俳優さんがポニー テールなんだって」大事などいづつな……」
まつたくこなたは……、

「あれ？みやなは？」

かがみがみやながいないのに気づいた。

「そりいえばいね？」

「どうしたのでしょうか？」

その時走つてくる音が聞こえてきた。

ダダダダダダダダダッ！

「『めん…遅れた』……」

みやなが息を切らしてこっちに向かつて來た。

「富山さんどうかしましたか？」

「弁当作つていたら、こんな時間になつてしまつて……」

「そりだつたの？」

「全員そろつたし、行こうか？」

私達6人は学園に向かつて歩いた。

時間は経つて昼休み

△G組教室

弁当を持つて廊下に出よつとすると

「こなたのクラスに行くの？」

みやなが聞いてきた。

「うん、みやなも行く？」

「行くに決まつてるでしょ？」

みどり以外友達いなし、

私とみやなは教室を出た。

△E組教室前

「「あやつ……」「

急に出てきた人とぶつかつた。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫かあやの？」

みやなと誰かがはもつた。

「「むつ……」「

お互ひを睨み合い火花が散る。

「お、落ち着いてみやな」

「落ち着いてみさちやん」

今度ははくりよつとわつきとは違う人がはもつた。

「「本物」めんね、みやな（みさちやん）むきになる性格で・・・」

「

再びはもつてお互いを見つめて、

「（あれっ？この子どこかで見たような・・・）」

「「あつあの～？どこかでお会いしましたよね？」

またはもつた。

2人とも見覚えがあるようだ。

「（この子どこかで・・・）」

「（ポニー・テールを解いたら・・・）」

シユツ

女の子が私のポニー・テールを解いた。

「やつぱり！祭りの時、財布拾ってくれた子ね！？」

「それじゃあ・・・財布落としたの貴女だつたんだ？」

やつぱりあの時の子は貴女だつたんだ。

「ん？あやの知り合いか？」

「みどり？知り合い？」

またはもつた

「まあちょっと」

「すれ違つただけだけど・・・」

この子と出合つたのは、2年前の夏

＜2年前＞

この日は、本来なら母と一緒にショッピングや食事をする予定だったが、急な用事が出来たため中止になった。
こなたも朝から出掛けており、遊べない。

家で一人で過ぐさうと思つてたけど、隣町で縁口があるので聞いて、着物に着替えて行ってみた。

＜隣町の縁口場前＞

「うわあーーー混んでるねえ」

もの凄い人ごみで、友達と来ていたらはぐれそうになるほど混んでいた。

「ひとまず、回りつか

とりあえず縁口を一回りする事にした。

＜1時間後＞

「うわっ！なんでこんなに…？」
さつきよりも混んできた。

「これ以上此処にいるのは危ないし、帰るか
混んでるのは嫌なので、帰ることにした。

その途中

ガシャ、チャリン

「ん？」

何の音？

足元を見ると布袋が落ちていて、柄的に女の子の物だった。
拾つてみると、お金の音がした。

「誰が落としたのかな？」

ひとまず落とした人を探すことにした。

「困っているだろうなあ」

落とした人を探していると、声が聞こえてきた。

「あ、あれっ？おかしいなあ～」

「どうしたあやの？」

「さ、財布が・・・」

「どうやら財布を落としたようだ、もしかしてこの子かな？」

「あの～？もしかして、これじゃあありませんか？」

布袋を女の子に差し出す。

「あ！それ！拾ってくれたんだあ！！！」

「うん、『困ってるだろうなあ～』と思つて」

女の子は布袋を受け取つて嬉しそうだった。

「ありがとう！・・・あなた、やさしいのね

「やさしい？」

「だつて、普通落ちているお金つてそのまま黙つて持ち帰らない？」

「私は交番に届けるかな？今日は持ち主を探していたら偶然あなたが、財布を落としたように見えて、『もしかしてこの子かな？』と思つて」

「まあ財布が戻つてよかつたじゃんあやの？」

「この子はマイペースな子だね、

「うん、それじゃあ私達はこれで

「バイバイ

振り返ると、女の子はまだ手を振つていた。
私はその場を去つて家に帰つた。

▽ E組教室 ▽

「へえー、そうだつたんだあ！！！」

「そういうえば、そんなことあつたなあ

私達4人はE組教室でお皿御飯を食べている。

「そういうえば、自己紹介ていなかつたわね、私は山村白緑、こつ
ちは富山みやな」

「よろしくね」

「ウチは田下部みさお」

「私は峰岸あやの、よろしくね」

「そういえば、E組ってかがみもE組だったよね？」

「みやなが2人に聞いた。」

「う、うん柊ちゃんも同じクラスなんだけどね・・・」

「中学から数えると、3年連続なんだけどなあ～」

「さ、3年連續！？」

小学、中学で連續はありえるけど、中学、高校では聞いた事無い。

「みやなは向こう（北海道）で同じ子と何年位同じクラスになつた事ある？」

「うーん・・・・幼稚園の頃から11年間同じクラスだった子がいたかな？」

「――じ、11年間！？」

その数字に私もあやのも、みさおも驚いていた。

「私が引越さなかつたら、12年間連續だつた可能性も、あつたんだよね」

「――じ、12年！？」

再びその数字に驚く、

「でもどうして、引っ越したんだあ？」

みさおが聞いてきた。

「家、元々ラーメン屋で移転するために引越したの」

「へえー、富山さんの家つてラーメン屋さんなんだ」

「行つてみたいなあ～」

「それは・・・・、ちょっと無理かも」

楽しいムードだつたが、みやなが暗いムードに変えた。

「ええ～！？なんでだよ！～！」

「わ、私の家は北海道だから・・・・」

「な・・・・、納得」

どうやら、納得したようだ・・・・、

「でも富山さん、どうしてわざわざ陵桜に？」

「両親が陵桜出身で、小さい頃から『行ってみたい』と思っていたの」

「へえ～やつだったの？」

話しているうちに昼休み終了のチャイムがなった。

慌てて私とみやなは自分の教室に戻った。

＜放課後＞

放課後に委員会があつたため、かがみと途中駅まで一緒に帰る」と
にした。

その途中

「ねえかがみ

「なに？」

「今日E組で、峰岸と田下部って言ひ」と話したんだけど

「峰岸と田下部……」とつづかで聞いた事あるような……

かがみが考え込んでいる。

「中学から同じクラスって聞いているけど……」

「え・・・・・・・あ、あれ？」

「もしかして、全然覚えていない？」

「あ、いや、中学時代いたのは覚えているんだけどね……同じクラスだったかは……」

「覚えてあげようよ、同じクラスなんだから……」「うん……」

正直この時、かがみとあやの、みさおは友達なのか疑つた。
しかも翌日、休み時間にE組を覗いてみたら、かがみの姿はなかつ
た……。

第8話 2年ぶりの再会（後書き）

それで次回の『みどりすた』は?
あやのです。

山村ちゃんのおかげで背景にならすにすんで正直嬉しいです。
ありがとうございます、山村ちゃん。

次回『峰岸家 初訪問』
お楽しみに

第9話 峰岸家 初訪問（前書き）

遅れて申し訳ないです。

更新速度を上げなくては……、

第9話 峰岸家 初訪問

GW最初の日。昨日からみやなの家に泊まり、宿題、休み明けのテストに向けての勉強をしようと思ったが、みやなのバイトの関係で、今日は夕方まで1人で勉強しているはずだった・・・・・

ガタン、ガタン

私は電車に揺られて、ある場所に向かっている。

「そういえば、あやの家に行くのって初めてよね？」
どんな家だらう？

私の向かう駅はあやの家の最寄り駅。
なぜあやのの家に向かうかは昨夜、あやのからの電話を受け取ると
こうまでさかのぼる・・・。

「勉強会？」

『うん、宿題と一緒にしない？山村ちゃんって勉強得意だったよね？』

自己紹介で述べたように、勉強で苦手な事は無い。強いて言つと、
美術がちょっと苦手な程度。

「私は構わないけど、分からぬ所もあるの？」

成績は提示版で見た程度ではあるが、あやのの順位は真ん中位だった。

『うん、数学が苦手でね、それにもうひとつ問題があつて・・・』

「もうひとつ？」

なんだろ？

『みさちやんなんだけど、めんどくさがりで、私じゃあ手に負えない
くて』

頑張れば、結構出来るんだけど・・・、

「なるほど（汗）・・・、確かにみさおはちょっとヤバイかもねえ
？」

これも提示版で見た程度だけど、みさおの順位は下の方だった。

「まあ、上手く教えられるかは分からぬけど私でよければ手伝つ
りよ

あやのが困っているし、見捨てるわけには行かない。

以前あやのから聞いた話だと、みさおは頑張れば結構出来るみたい
で、上手くエンジンを掛けられるかが力ギだな・・・、
明日の集合時間と場所を確認して、必要な筆記用具、教科書、ノー
トを準備しておく。

そして、寝る前にふと気がついた。

「高校で出来た友達の家に行くの初めてじゃあない？」

こなたは転校した時から、みやなは中学の時に知り合つてからの友
達で、こなたの家では、居候させてもらつていて、みやなの家では、
今泊まつている。

みゆき、柊姉妹の家はまだ行つていない。

どんな家なのか、気になつてなかなか眠れず、いつも6：30に起
きるのだが、目が覚めたときは7：00を回つていた。

慌てて寝癖を直して、朝食を取る。みやなから予備の鍵を受け取り、
みやなを見送つて、少々宿題をする。

大体の時間で家を出て、集合の場所に向かう。

集合は鷺宮駅に10時。

9：50

「着いた～」

駅に着き両足を同時に出し、ホームを歩き改札口に向かう。

改札口に向かうと、声が聞こえた。

「山村ちゃん」

あやのがいた。

「おはようあやの」

あやの服は可愛いワンピース。でも勉強会に着る服だらつか？

「今日はわざわざありがと！」

「あ、いや今日は暇だつたし」

それより、あやのとみさおのためなら、私で出来る事なら頑張りたい。

「それじゃあ行こうか？」

「うん」

私とあやのは勉強会が行われるあやのの家に向かった。

あやのの家

「お邪魔します」

「おお、いらっしゃい」

みさおが出迎える。服は、トレーナー＝ジャージ、まあ楽な格好だ。

「山村ちゃん、ちょっと待つてね」

「ん？どうかしたの？」

「ちょっと着替えるから……」

「え？それじゃあその服、私を出迎える為にわざわざ着たの？」

「もうだけど……」

やつぱりそうだったのか、

「別にいいよ、友達なんだから」「でも、初めて家に来るんだから、『おめかしでもしておいで』と思つて……」

あやのは、気遣いが強いのかな?

そう思つているだけにあやのは、上に上がつていった。

×10分後

あやのは、楽な格好をして、戻つてきた。

「それじゃあ山村ちゃん、今日はよろしくね

「うん、じゅりんや」

「はあ～試験の前つて急にこつもやつてる部活が無くなつてやる」とないんだよねえ～」

「だから勉強するんでしょ？」

そのためにあるんだし・・・

「いや～それは分かるんだけど～？普段部活してこる時間が自由だと『ちょっと違う世界が見える』って言つかね？そう考えると勉強なんて、勿体なくてできねえじやん？」「そわそわ、わくわくしてさあ～？

「とりあえず、目的はみさおのためにやるんだから」
自覚してよ、今日の勉強会は、

その後3人そろつて、あやのの部屋に移動して、勉強会を開始した。

×30分後

「疲れた～」

「はやつ！？」

早すぎでしょ？

「少し休憩しようよ～？」

「目的意識が無いから集中できないんじゃない？」好きな事やること嫌いな事やる差見たいに・・・

「将来の夢とかないの？」

「夢か？」

「うーん・・・・・・

「『将来の』つと言つわけじゃ ないけどこの時期つて宝くじでも当たつて『楽に生活できねえかな～？』とか思わない？」

なんかだるくつて・・・

「あやの？あの子なんとかならな～？」

まるでこなたみたいだ・・・・

「頭使うときはやっぱ甘いものが需要だぜー！」

「宿題終わつたら、この前作つたお菓子出してあげるから」

頑張ろうよ

「あやのお菓子作るんだ？」

「味の保証は出来ないけど・・・・・」

「いや！味良しよりあやのはまごついだぞ

「（『勉強めんどくさい』『みどりっ夕飯できたよ～』）」

「どうしたの？」

「あ～、いや・・・・・、類友とは思わないけど・・・・・『友達つて似たタイプが多いなあ～』と呟つて・・・・・」

その後無事に今日の分を終え、あやのの部屋でお菓子を食べながらお喋りをしてくる。

ちなみにみさおから見たら私の1日分は、2日分に当たるみたい・・・・・

今話しているのは部活動の話

「へえ～みさおは陸上部、あやのは茶道部に入つていいんだあ～？」

「うん、山村ちやんは部活動何に入つているの？」

「えつ！？わ、私！？」

不意を突かれた。

「中学まで剣道部に入っていたんだけど、私は『勉強の方が合ってる』と思つて……部活は入つてないの」
他にも理由あるけど……、

「なんだ？」

その後お喋り会は気が済むまで進み、みさおが帰ると同時に、私も
帰ることにした。

私は今、帰りの電車の中

「ふう～」

ため息を出して、今日を振り返る。

「やつぱり……、友達は多くいるべきね

小学時代は友達といつたら、こなたしか居なかつた。
もう一人いるけど……、

その後、無事にみやなの最寄り駅に着き、無事にみやなの家に着いた。

みやなは、

「私も行きたつかたなあ～？」

と愚痴をこぼしていた。

第9話 峰岸家 初訪問（後書き）

さて次回の「みどりすた」は？

つかさです。

ふえ〜ん出番がすくないよ〜

えつ？ 次回出番あるの？

じゃあ、はりきつちやお〜

かがみ「次回はあなたのためにやるのよ？」

ううう分かつてるよ〜

次回『格家 初訪問』

お楽しみに

第10話 桜家初訪問（前書き）

新たな登場人物がいるので紹介します。

桜 みき

かがみ、つかさの母親。

4女の母親だが、見た目は20代にしか見えない。

桜 いのり

桜家の長女。会社員。ときどき巫女になつて神社を手伝つている。
母親に似ている。

桜 まつり

桜家の次女。大学生だが、勉強のほうであまり妹達に信用されていない。

作者より

お、お待たせしました。

第10話 栄家初訪問

【栄家】

GWも明日で最後の夜。

かがみとつかねは居間でTVを見ている。

面白いのか、笑っている。

居間に男性が入ってきた。

お父さんだらうか・・・・・

「2人共、明日で連休最後だけど、宿題は済んでいるのかい?」

「じ、実はまだだつたり・・・・・・」

長い休みってどうしても遊んじゃうよね・・・・・

「困っちゃつたね、ねえ?お姉ちゃん」

「・・・・・」ゴメン私もうほとんど終わってる・・・・・

夜とかに少しづつやってたし、

え?休み中ずっと一緒に遊んでたのに?

【その頃泉家】

力チャ力チャ

こなたが部屋でパソコンに夢中になつてゐる。

コンコン

ドアを叩く音がした。

「誰?」

「私よ、白縁

「どーぞ」

力チャ

こなたの部屋に入る。

「どうかしたの白縁?」

「あんたも出されたはずよね?」

「な、何を?」

「すっかり忘れているわね?宿題出されたはずだけど?」

「・・・・・」

忘れてた・・・・・

「はあー」

本当にこの子(こなた)は・・・・・

「宿題出しなさい、やつてあげるから」

「いつも悪いね、それじゃあ頼むよ」

他人から見たら不思議な行為だが、私とこなたから見たらいつも
事で、連休や夏休みの終わりには私に泣きついで頼んでくる。
泣々やるのだが、やる私の身もなつてほしい・・・・・

1、2日でやるの大変なんだから・・・・・

「やつてほしーなら早く頼みなさいよ?」

「ゴメンゴメン」

髪をかいて謝るこなた。

私はこなたの部屋から出て私の部屋に入る。

「さてつ、始めよつか」

机に向かいこなたの宿題を始める。
見ると1問すらやっていない。

「はあー」

呆れてため息を出すも、作業を始める。

その時・・・・・

トルルルル、トルルルル

私の携帯が鳴った。

画面には『柊家』と出ていた。

以前私の携帯番号を教えた代わりに、柊家の電話番号を教えて貰つた。

「もしもし

『あっ、はくじょう?..』

かがみの声だった。

「かがみ、どうしたの?」

『はくじょう、明日は空いてる?..』

『空いてるけど』・・・・・

何か用事でもあるのかな?

『それじゃあ明日家に来てくれない?..』

「えつ?な、なんで?」

『うん、ちょっと手伝ってほしい事があつて・・・・・』

「な、何を?」

『宿題の答え合わせを兼ねて勉強会をしようと思つて・・・・・』

『答え合わせか・・・・・別に良いけど、何で手伝ってほしいの

？」

『実はつかさの事何だけど…………あの子の宿題全然出来ていないのよ』

「な、なるほど…………」

それで手伝つてほしいのか…………

「分かつた良いよ私でできる事なら」「ひら

『ありがとう、それじゃあ明日頼むね』

お礼を言つて電話は切れた。

「やつすると、こなたの宿題どつじょう…………

もう私の宿題は終えてるし…………

「しかたない、持つて行くか…………」

私はこなたの宿題を持つて行く事にした。

【翌日】

AM 6:50

「う~ん

昨日は2時までこなたの宿題をやつていた。

「初めて夜更かししたね…………」

体が重く、思うように動かない。

寝たいけど、今日は料理当番なので、キッチンに行って朝御飯を作らなくてはならない、

「しかたない…………」

眠氣をこじらせてキッチンに向かつ。

朝食を作り終え、朝食を取る。

その後、時間を空いてかがみの家に向かつた。

AM10:00

「にしても……」

私が今いる場所は神社の鳥居の前

何でここにいるのかは、ある理由がある。

「まさか、私とあやのとみさおが出合つた神社が柊家の神社だった
なんて……」

この神社はお正月には初詣、夏には夏祭りがあり、にぎわう神社で
あり、柊家はそれを司る家柄。

「なんか……運命を感じるわね

私は神社を後にして柊家に向かつた。

【柊家の前】

「…………よね？」

表札には『柊』とかいてあるから多分こじだらけ

ピンポン

インター ホンを鳴らす。

しばらく立つとドアが開き、中から女性が現れた。

「は～い、あら～あなたがかがみとつかさのお友達？」

「あ、はい。始めてまして。山村白縁と申します」

「どうぞあがつて、かがみ～、つかさ～、お友達が来たわよ～」

「「は～い」」

お姉さんに呼ばれてかがみが玄関にやつてきた。

「いらっしゃい白縁。今日はワザワザ「めんね。」

「あ～、いいよ、今日は家でゆっくりしていろつもつだつたし・・・

・、別に構わないよ」

「今つかさがクッキー焼いているの。もうすぐ出来るから先上がつて」

「2人ともずいぶん張り切つてたものね？」

「ちょっとお母さん！？変なこと言わないでよー。」

「く・・・？」

今お母さんて言つたわよね？
見た目若すぎ・・・・

「白縁どうかした？」

「あ、いや・・・・」

私のお母さんもそうだけど・・・・、年齢と見た目つてすいこ差があるのよね・・・・

「お母さんみてビックリした？」

「はこ・・・・・」

私の驚いた顔を見て終母がなにやら嬉しそうだ・・・・というか考えた事ズバツとあてられた（汗）
かがみは何がなんやらという顔をしていたが気を取り直して私を部

屋まで案内してくれたが……。
どこからか視線を感じるのはなんだろ？

【かがみの部屋】

「にしても、かがみの部屋つて私の部屋と似ててるわね」

所々にぬいぐるみがあり、

違うのは、小説らしきものが結構並んでる……かがみは読書
が好きなのかな？

私の部屋にはテレビがあり、無い分広く感じる。
広さは私の部屋と同じくらいかな？

「やうなの？じゃあ次勉強会する時は白縁の部屋でやりましょう」

「……」

別にいいんだけど……こなたが邪魔するから、私の部屋である
のはちよつとねえ……

「どうしたの？」

「うんちよつとね……」

私はこなたについて話した。

「……」

かがみは驚いた顔をしていた。

その証拠に開いた口が塞がらないようだ……。

「それでテスト大丈夫なの？」

「あの子、一夜漬けが得意みたいで……、成績は上位に入ってるし」

「えつ？」「嘘？」

また驚いていた。

「みどりちゃんにいらっしゃーい、クッキー焼けたよ」

「あ、お邪魔しているね、ありがとう」

そこにつかさが焼きたてのクッキーを持つて来てくれた。美味しそうな香りが部屋いっぱいに広がる。

「それじゃあ一つ……美味しく！」

「ありがとうございます、たくさん作ったからいっぱい食べてね」

この前あやのの家でお昼食べたけど、その時出された料理も美味しかったし、

みやなも料理上手だし、こなたもそうね、この4人で料理対決したらどれが一番になるのかな……

そつ考えている内に勉強会は始まった。

「みどりちゃんはどの位やったの？」

「もう終わってるよ、私はかがみやんと答えたわせしながらつかさの指南役」

「え、そな？みどりちゃん頭良いんだ」

「感心してる暇があるならちやつちやと始めなさい。分からぬい所は教えてあげるから」

そう言つて勉強会開始

勉強中も視線を感じるのはなんだろ？

【昼食後】

午前中で答え合わせが終わったので、私は鞄からこなたの宿題をだす。

「あれ？ 白縁それは？」

「これはこなたの宿題頼まれちゃつて……」

「あの、白縁……こなたの宿題はこなた本人がするものじゃあ……」

かがみが正しい答えを言つ。

「うん、そなんだけど……こなたには色々お世話になつてるし……」これは私からの『お礼』見たいなもので……」

必死に講義する私

「まあ、白縁が良いなら私は文句は言わないけど……」

かがみはつかさの指南に回つた。

私はこなたの宿題を始める。

「ん？」

ふと見ると部屋の入り口が微妙に開いてる。

よく聞くと誰かがヒソヒソと話をしてるようだが……？

「結構可愛い子ね」

「まつり……いい加減覗きなんてやめたら？」

「そういう姉さんこそかなり乗り気だったじゃない？」

「別にそんなんじゃないわよ。ただかがみ達が知り合つたばかりの友達を呼ぶなんて今まで無かつたから少し気になつただけで……」

キイツ。

「「あ・・・・」」

「えへと・・・・何をしてこらつしゃるのですか?」

なんとなく怪しい雰囲気をかもし出していたから、気がつかないよう無言で入り口を開けてみた。

そこには2人の女性がやつぱり怪しい体勢で、何だか覗き見をしてるような・・・。

ひょっとしてここに来たときから感じてた視線つて・・・?

「お、お姉ちゃん達! ? 何やつてのよそんなとこでー。」

突然の出来事にかがみが慌てふためくが、別にやましい事をしているわけじやないし。

ちなみにつかねは事態を飲み込めずキヨトンとしてる。

「あ、あはは。気にしないで続けて。どうどう! めぐくつー!」

「あ、こらまつりーもづ・・・お邪魔してごめんね?」

そういうて2人は下に(まつりと呼ばれた方は逃げるよつこ)降りていった・・・。

事態は把握したもののさすがに反応に困る。

「今の2人はお姉さん・・・? 間はいなかつた様な気がするけど。」

「もうよ。まつともー、まつり姉さんはともかくいのり姉さんま

で何やつてんだか。」

昼間いなかつたのは家の手伝いをしてて昼食時間がずれたとか。
しかし6人家族とは聞いていたけどがみにつかさ、そこに姉が2人・・・・・親父さんは肩身が狭そうね・・・・・。

「は～うらやましいわね・・・・・」

「何が？」

「こんなに家族がいる事よ、私一人つ子だつたし・・・・・」

「そなんだ」

「それに・・・・・お父さん小さい時亡くなつてるし、お母さんは私の為に仕事で頑張つてたし、『家族の温もり』って私知らないのよね・・・・・」

「「え・・・・・?」」

暗いムードが部屋中を包む。
つかさも事態に気づいた。

「「「」、『めん・・・・・』」」

「いいよ、もう慣れてるし・・・・・」

【PM5：00・終】

その後は何事も起こらず、勉強に集中できた。

こなた、つかさの宿題も無事に終わる事が出来た。

「え～と・・・・・それじゃあお邪魔しました。」

玄関先でなぜか4姉妹そろつてお見送りしてくれた・・・・・私、そんなに何か気になるようなことをしただろうか?

逆に恐縮してしまつ。

「またいつでも遊びに来なよ」

「まつりーあんまり白緑ちゃんを困らせないの」

「そうよまつたく・・・また明日ね?」

「宿題教えてくれてありがとう。またね~」

「はは、ありがとうございました。それじゃあまた明日ー。」

お辞儀をして柊家を後にす。

長くて疲れたけど・・・その分楽しく過げさせた。

こういう勉強会ならいくらでも大歓迎。

これからの中園生活は退屈はしないと確信しつつ帰路についた。

その後の中間テストの結果・・・

「山村さん、頭良いですね?」(学年トップ5入り)

「そ、そんな事ないですよ・・・」(学年1位)

「もう、照れちゃって・・・(みやな)」(平均80点半ばくら
い)

「が、頑張ったよ・・・」(平均60点)

みゆきは頭良いみたい。

つかさは・・・次も頑張るつむ?

だけど・・・

「おかげさまでバツチリ」（平均80点前後、最高100点）
「こなたの結果だけ納得できない・・・」（平均95点前後）

私もかがみと同意見である。

第10話 栄家初訪問（後書き）

さて次回の『みどりすた』

みやなです。

もうすぐ田縁の誕生日です。
えつ？

その前にこなたの誕生日があるの！？
何かお祝いしなくちや、

次回『蒼髪色の誕生日』
お楽しみに

第11話 蒼髪色の誕生会 前編（前書き）

小早川 ゆい
(こばやかわ ゆい)

年齢：24歳

身長：166cm

出身地：埼玉県

誕生日：10月7日

血液型：A型

利き手：右利き

家族構成：父、母、長女、次女

胸ランク：大

好きなもの：おせんべえ、野菜炒め、古いゲーム

嫌いなもの：一部の野菜（とくにトマト等）

得意科目：道徳

苦手科目：数学

好きな色：青

こなたの従姉妹できよたかさんと結婚する前（1年前）でまだ独身

小早川 ゆたか

(こばやかわ ゆたか)

年齢：13歳

身長：138cm

出身地：埼玉県

誕生日：12月20日

血液型：A型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長女、次女

胸ランク：極小

好きなもの：温かいもの（うどん等）、動物
嫌いなもの：牛乳、攻撃的な人

得意科目：国語

苦手科目：体育

好きな色：桜

こなたの従姉妹。背が小さい事をコンプレックスにしている。

作者より：2ヶ月更新しなくて申しわけございません。
しかも改名までしてしまってまことに申しわけございません。

第1-1話 蒼髪色の誕生会 前編

6円に迫ってきたある日

【1-3】

「わういえば・・・・もつずぐー」なたの誕生日ね・・・・

「そりなんだ?」

「あれ?・・・・白縁と近いじゃない?」

「へえ～わうなんだ?白縁ちゃんの誕生日って何時?」

「6月6日、みさおとあやのは何時?」

「私は7月20日」

「私は11月4日」

みさおは7月20日、あやのは11月4日か・・・・
ところが、みさおは本当に太陽が似合つね・・・・
ちなみにみやは1月1日である。

「ねえ?何をプレゼントしたら喜ぶかな?」

「大体分かるでしょ?」

あの子の事良くみれば?

「や、そうね・・・・それじゃあ好きな食べ物は?」

「『鶏肉は好き』って言つてたから、鳥料理はどうかな?」

「それじゃあ『鳥の唐揚げ』はどうかな?」

「良いわねそれにしたら?」

「うん、そうする」

「それじゃあ私はケーキを作らうかな?」

「プレゼントは・・・・・・・・

いつもこなたの誕生日の行程が練られていった。

5月28日(土)

【みやなの家】

PM 2:00

「ふー出来た」

テーブルには直径20㌢程のチョコレートケーキがあり、真ん中には『こなた お誕生日おめでとう』、周りはチョコホイップでコーレーションされていた。

「上出来ね」

「こなた絶対喜ぶよ」

「でなきや作った甲斐が無いわよ」

朝5時から起きて、生地を焼いて、クリームを泡立てて、デコレジョンをしてともう大変だつた。

既に疲労はピークを迎えていた。

でもこなたの喜ぶ顔を見ないと思つと力がわいてくる。

「さて、行こうか」

ケーキを箱に入れて家を出る。駅に行き列車に乗ろうとした。

すると・・・・・

ピッピッ!!

「ん?」

振り向くと青い車が止まっていた。

「やつほー白緑じゃん?どうしたの?」

「あつゆい姉さん」

「だ、誰?」

「こなたの従姉妹のゆい姉さん」

「そ、そなんだ・・・・・」

テンション高いわねこの人・・・・・

「あ、そうだゆい姉さん今から帰る所?」

「ん？ ただけど？」

「こなたの家まで送つてくれない？ 今日こなたの誕生日でこなたの家に行く所なの」

「そつか今日はこなたの誕生日か…………」

月日が立つのは速いねえ…………

「OK！ ……後ろに乗つて」

「ありがとう」

私とみやなは後ろに乗る。

プロロゴー

「ところで白縁、その箱は？」

「これはこなたの誕生日ケーキ、朝から作ったの」

「それは」「苦労だったねえ…………ところで白縁その子は？」

「あ、申し遅れました。私はみどりの友達の富山みやなです」

「よひしへ」

「ゆい姉さんは職業何をしているのですか？」

「ん？ 警官だよ」

「婦人警官かあ…………凄いなあ」

「警官といつても色々あるんですね？」

「そづこえば『警官』つてさもざまな部課があるのは知つているけど……

なにがあるのかは知らない…………

「ん？ そうだね、まあ私が勤めているのは『交通安全課』という所だよ」

「へえ」

呑氣に自己紹介をしているみやなどあい姉さん。すると・・・

ブオオーン

猛スピードで車が通り過ぎた。

「わあ！速！」

「ああいう車があるから事故が絶えないんだよね・・・」

「ロボットアーキテクチャ」

な世がゆい姉さんの色が変わつていた。

「えつ？ ちょつ？ ゆい姉さん？」

「人共 江戸へリトナサんと一言であるよれ」と

「ああ～～～！？」

突然アケセルを踏み込み、猛スピードで先程の車を追いかけ始めた。

メータは見えなしけど體験しなぐ100KMは超えてしゃい・・・

「ゆ、ゆい姉さん！？私ケーキ持つているんですけど？」
「私の走りの前に的はな～い！！」

前を走ってるほかの車や対向車を絶妙ついや紙一重で次々にかわし、信号もギリギリで走り抜けて・・・てコレでいいのかな？

「ダメだ・・・・全然聞いてない・・・・」

みやなの方に目を向ける。

「み、みやな大丈夫・・・・って！」

みやなはもう目を回していた。

「も、もづダメー」

みやなはすでに錯乱状態。

ああ・・・私も・・・限界・・・目眩が・・・眠気が・・・

「・・・縁！白縁！もづ着いたよ」

「・・・うへん」

田を覚ますとそこは「」なたの家の前だった。

「疲れて寝ちゃつたのかな？みやなも起っこしてくれる？」

確かに疲れていたけど・・・間違いなく原因はゆい姉さんあなたです。

横を見るとみやながまだ気を失っていた。

「みやな、着いたよ？」

「ふえ？着いたの？」

といつあえず車から降りて立つてみると・・・まだ地面が揺れるような気がする・・・。

ゆい姉さんは一度家に帰るそうで降りた後すぐに発車した。
坂の上で車が宙に浮いたように見えたけど・・・

「あっ！け、ケーキは・・・」

箱を開けると、ケーキは何事も無かつたかのように無事だった。

「ふう良かった・・・」

「と、とりあえず中に入ろうか・・・」

「う、うんそうだね・・・」

ガチャ

「こなた〜？来たわよ〜？」

「おおいらつしゃい〜」

こなたが階段を降りて来て私達を迎える。

「おお！？それはもしかして手作りケーキ？」

「うん、みどりが朝5時から作ったんだよ」
みやなが私の変わりに代弁する。

「だからみやな！！私が言いたい事言わないでよ〜？」

「お〜お〜みどりんは照れ屋ですか〜？」

「う、うるさい！！」

パシッ、バキヤ

2人を暴力ではあるが、叱つた。

「〜、ごめんみどり、私調子に乗つて・・・」

「分かればいいのよ・・・痛かつた？」

「う、うん大丈夫・・・」

みやなが謝罪した。

私は笑顔で叩いたところをなでなでする。

「あ、あのみどりん・・・この差は？」

みやなは頬をビンタされただけだが、こなたの頭には大きなコブが出来ていた。

「なんか文句ある！？（怒）」

「い、いえなにも……」

鬼の形相の用にこなたを睨めつける。
みやなはクスクスと笑っていた。

その後リビングに移動し、ケーキを冷蔵庫に入れる。

「ねえみどり? こなたの誕生会何人来るの?」

「えつ? え? と私とみやな、こなたのお父さん、ゆい姉さんと……」

「後はゆーちゃんだね」

「ゆーちゃん?」

「ゆたかの事ね……でも来るかどうかはまだ分からぬよ」

「え? どうして?」

「ゆーちゃん体弱いからね……」

「そうなんだ?」

私もゆたかを見たのは4回あるけど、その内3回は体調を崩して寝ていてハツキリとは見ていない。
でもお互いの顔と名前は覚えている。

「さて、私は料理するから、2人は遊んでいいよ」
みやなはエプロンと三角巾を着てキッチンに向かつた。

「さてこなた、私達は何をする?」

よし、それじゃあ狩をしよう! ……

【こなたの部屋】

現在モハ中

こなたは上級者

私は最近なれてきて中級者

といつか・・・こなたのプレイ時間は私の4倍以上……

『こつやつているの?』と思う位やつている。

私は勉強の合間を縫つているから最高でも1日1～2時間位するところなの1日のプレイ時間は6～8時間位……

『どんだけやつてこるの?』と言いたい位……

すると……

「ふぐあー……

こなたは大きなあくびをする。

「もしかして徹夜?」

あつ、そうか……寝てる時間を……いや、勉強時間を削つてやつているのか……

そういうえば中学時代も授業中寝てたわね……

「うん」

「だったら少し寝てれば?こなたがいなんじやあ誕生会出来ないし……」

「んじやお皿葉に甘えて少し寝てるね」

そう言つてベットにダイブする。

「本気なの?」

客人がいるのになるなんて……がっかりよ……

「たく・・・・しじょうがないわね・・・つて」

ベットに田を向けるところなたはすでに寝ていた。

「本当に寝ちゃったの?」

「クー・・・・

「速すぎでしょ?」

ベットに座る。

「いつもはオタクで小悪魔けど、寝顔は可愛いわね・・・

どうしてかなさんの娘なのにこんな風になつたのだろうかな?やっぱそれはお父さんの影響かな?

「う・・・

つん

「あなたの頬をつつく

「中には誰もいませんよ~」

「どんな寝言よ~?」

「うふつ・・・

「寝顔は可愛いのに・・・」

赤ちゃんが寝てるようないい・・・

「意外とまづげ長いんだね・・・」

手入れをしていないのね・・・

「あ・・・なんかいいにおい・・・」

髪からシャンプーのにおいがしている。

ちゃんと髪は手入れしているんだ・・・

「ちょっとイタズラしちゃおつかな?」

いつも自分が大変な思いしているし・・・

「あま~い・・・」

髪を手に置く。

「トッ

ハツ

後ろを振り向くとみやなが立っていた。

足元にはジュースの入ったペットボトルが転がっていた。

ズリッ・・・

みやなは後退りする。

「あ、いや・・・」これは・・・

「『アーリーハウス』!」

ダダダダダ

みやなは慌てて下に降りて行った。

「う、うひつよつ・・・・・

おひおひじてこぬと・・・・・

ゴクシ ゴクシ

振り向くとこなたがジューースを飲んでいた。

「ブハー」

「ど、どこから起きていたの?」

「ん?『寝顔だけなら』ってあたりから・・・・・

「みどりんたらだいたんだよな?ナニそれのかドキドキしおり

たよ

ワナワナと怒りがこみ上げて来る。

「いいにおこ・・・・・

ガン!

「イタズラしおりかおかな?」

「ゴン!」

「あま~こ・・・・・

こなたは「ヤシ」と笑っていた。

「う・・・・・ウフ」

私は涙を流して、手を拳にして。

「こなたあ~・・・・・

「うひつ!おー!?

白縁からは怒りのオーラが出ていて。

こなたは動くに動けない。

「いい加減にしなさい! !

「いいにね! !

「ン、バキ、バキヤ

「ハハヤあー！」

こなたに鉄拳を叩いた。

その頃・・・

【キッチン】

「み、みどりがあんな事を・・・」

みやなは顔を真っ赤にして料理をしていた・・・

第1-1話 蒼髪色の誕生会 前編（後書き）

さて次回の『みどり』は？

作「あれ？」

誰もいない・・・

作「まあ『前編』で書いてあるから分かりますよね・・・」

作「次回『蒼髪色の誕生会 後編』」

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2907f/>

らき すた もう1人の中心人物

2010年10月10日13時26分発行